

前橋文学館報

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち



No.7 1997.6



文学の現在

第38回前橋文学館アート・ステージより

秋山駿

平成9年3月15日当館3階ホールで、評論「信長」で野間文芸賞・毎日出版文化賞を受賞した文芸評論家で、萩原朔太郎賞選考委員でもある、秋山駿さんを迎えて講演が行われました。以下はその抜粋です。

最近いろいろな大きな作家が相次いで亡くなられた。一番近くは埴谷雄高さんが、その少し前には藤沢周平さんが、もう少しさかのぼると司馬遼太郎さん、遠藤周作さんが亡くなられました。この四人の作家は戦後の文学のなかのそれぞれの一つの流派と言いますか、それを代表しているような人でした。

戦後文学の代表に見る文学の流れ

埴谷雄高さんはもうほ五十年も書き続けていられる「死霊」と言っていると思いますが、難解な作品をずっと書いて、あるときには若者たちから畏怖された存在でしたけれども、埴谷さんには小説の独特の考え方があって、小説の方がものを考える思考の容器として哲学よりも優れてはいないか。哲学は、埴谷さんのことでは昭和期、そして戦争、敗戦を通じてのいろいろな時代の課題によく応えていないのではないか。小説の方がそういう問題をもっと深く追究することができるのではないかと考えるのにもとにずっとやってこられて、その文学の難解さが言われているわけです。

この埴谷さんの「死霊」の背後にある文学で、非常に大きい部分を占めるのはドストエフスキーです。第一次戦後派の作家たちは、ドストエフスキーの「悪霊」というのを非常にそれぞれの人が、ある到達すべき文学の目標のように考えていました。

埴谷さんは、小説がものを考える容器である。そして小説は、ある第一次戦後派の言葉を借りれば、哲学より深いものだ。これは敗戦から二十年たつての、二十年後の戦後派というところに出ていた第一次戦後派たちの言葉ですけど、いま時代が提出している問題というのはもう哲学者が直面して背負いきれない、応えきれない。文学だけがそれが可能なのだ。ですから、文学は哲学より深く、遠くに行かなければいけない、重い課題を背負っているということ、異口同音に言っていると思いましたが、埴谷さんはそこにまっすぐに歩かれたと思います。

埴谷雄高が「死霊」などで悪戦苦闘している横の方にいた批評家は小林秀雄です。あの人が戦後書いた「詩について」という文章があったと思いますが、若いとき、小林秀雄はポードレルなどを読んで、ポードレルの詩の魅力と一緒に、

その批評の精神に魅かれて批評の道に入ってしまったという。そこには「自己とは何か」という難題があつて、そこから入つていったと言つています。それは小林秀雄の最初に書いた批評から、戦後のあるところまでの批評、「本居宣長」まで一貫しています。一番はつきり出たのが、戦後のドストエフスキの「罪と罰」についてのエッセイです。一番最後にドストエフスキの問題のところに、ソクラテスやなんかも読んでいつているのは、「自己とは何か」という難題なのです。

この「自己とは何か」という難題は、もつと言葉をしばつてみれば、自然主義のところの初期のところにくつきり出るので、つまり、これは作家のそばにいた批評家ですけど、明治二十年代の後半です。「自然とは何ぞや」という問いは、自己とは何ぞやとの問いと同じく、非常に巨大なものだ」という言葉があります。自然主義の初期は「自然とは何ぞや」という問いから出てくるのですが、もう一つその後ろ側にあつたのは「自己とは何ぞや」。だからこの問いかけはずつとあります。

「死霊」の背後にある大きな文学には、ドストエフスキが小説を使つていろいろ考えていつた問題があります。日本の文学とドストエフスキの関係というのは、日本の近代文学を切り開いた最初にいた人から延々と、ドストエフスキ的な問題とドストエフスキ的な小説の作り方が、今日もはつきり形にならないけれども、そういう影響を与えているはずで。

次は遠藤周作。キリスト教を芯^{コア}においての文学ということ。やはり戦後の文学でしたら、遠藤さんは巨大な存在で

す。明治の近代化のところから日本の近代文学とキリスト教はかなり一致していた部分がある。キリスト教は日本の近代文学の最初の方から見え隠れしながら大きく流れていたと言つていいです。これが戦後はつきりキリスト教と日本、日本人の心、日本の民族としてキリスト教の問題をとらえたのが、この遠藤周作です。

日本人は神とどう出会つてゐるか。そういう問題があり、もう一つは悪の問題です。これについて遠藤さんが言つたのは、若いころに書いたもので、日本人は今まで悪という問題をはつきり考えたことがないのではないかという文章があつたと思います。これは現在の日本の文学にももつと深く追求すべき、未開拓の場面として残つてゐるような気がします。悪とは何かというのは、文学の中でももつと深く追求されなければいけない。神と悪の問題は一番大切なものだけに、よくはたどられてこなかったということです。これは、戦後の



●あきやま しゅん

1930年4月23日東京生まれ。1953年早稲田大学卒業。報知新聞社で勤務する一方、1960年に「小林秀雄」で群像新人賞を受賞。以来、文芸評論家として活躍中。現在は、文芸家協会理事を務めるほか、萩原朔太郎賞などの選考委員や、「早稲田文学」編集委員としても活躍中。1996年には「信長」で野間文芸賞、毎日出版文化賞を受賞。主な著書に「人生の検証」（新潮社、伊藤整文学賞受賞）、「内部の人間」（晶文社）、「歩行と貝殻」（講談社）、「無用の告発」（河出書房新社）、対談集「信長発見」（小沢書店）など多数。

学の中では遠藤さんが屹立きつりつしています。

藤沢周平は時代小説、歴史小説と言われる分野の人ですけれども、なぜ藤沢周平さんの作品が読者の心をとらえたか。これは日本の近代文学の最初から一つの歪みがあったからです。逆の言葉で言えば、これだけ日本の近代文学は鋭く始められたむずかしい文化なのです。

なぜかと言いますと、これは日本だけにかぎらず、どの国でも文武両道と言います。ですから、ちょうど「源氏物語」と「平家物語」のように、つまり歌や恋の問題のある片方に、戦争と武の問題があります。恋愛と戦争は文学の二つの大きな柱です。それはギリシア悲劇から、ホメーロスもそうです。これは人間の歴史を貫いているものです。

ところが日本の近代文学は、剣の問題はあまり書かれたこととはいいません。明治の近代文学を創始したときに、あういうのを全部否定してきた。あまりやり過ぎて剣にまつわるものは近代文学の中にほとんど流れていない。我々の明治以降の近代文学、殊に戦後の文学には、昔の人が義理と人情と言った、この二つのものはないようです。今ごく普通に言える言葉を持っているかどうかです。そういう場面をよく書いているかどうかです。よく書けていれば、この時代小説にいく必要はないのです。私は書かれていないのではないかと思うのです。だからあの時代が懐かしい。テレビでもいろいろ描かれて、ずっと続いているのは、それを欲しているのです。

また、日本の近代文学、そして戦後の文学は友情を書いたものが意外とない。どこにあるかと言うと、時代歴史小説です。日本文学全集に入っているような明治・大正・昭和の近



代文学の中に友情を書いたものは、ほとんど見当たらないと思います。ですからこれは意外に大切なものです。

日本近代文学と〈恋愛〉

戦後の文学のある変容を言うのに、アメリカを尺度にする一番分かりやすいことがあります。アメリカというのはアメリカ合衆国だけでなく、アメリカ的なものと言ってもいい。アメリカ化と言った方がいいですが、この問題は大きいと思いました。ますます大きくなっていると思います。

また、日本文学についての外国の学者がいることは、日本の文学にとって一種の幸福でした。ドナルド・キーンが面白いことを言っています。日本人は明治の近代化のときに「欧米の近代文学を読んで日本人は恋愛というものを発見した」と。日本人はそれ以前どうしていたのでしょうか。昔から恋という言葉はあります。万葉集などは恋の歌です。恋は詩の形、歌の形になる。これは完璧に文学のある原形です。そういう

もので日本は伝統が深い。恋が歌の主題になる。

でも、恋と恋愛はどこが違うわけです。恋愛というのは新しい言葉です。これは明治の近代化のなかで作った言葉です。前は恋という字を使ったり、情という字を使うとか、それでよかった。そして我々にはよく分かることがあるけれども、だから発見した部分があるわけです。例えば、その一つはブラトニククラブという感じとか、絶対的恋愛と言っています。それを日本人は知っていたかどうかですね。

さつき日本の近代文学はもう剣のことは出てこなくなつたと言いました。代わりにあるのはほとんど恋愛です。日本は恋愛を書くために苦勞したのです。というのは、変な話ですがドナルド・キーンは知っているのです。欧米の近代文学で読んだときに恋愛を発見したと言っているでしょう。日本の近代文学は二葉亭四迷からずつと恋愛を書くために苦勞したのです。日本の近代文学は恋愛が主題です。それで悪戦苦闘するのです。つまり、恋というのではなく、愛というのがくつついたのは、恋のなかの清らかなもの、聖なるものを書くうと一生懸命努力するから、日本の近代文学の中に書かれてある恋愛はほとんどからだの関係にいついていないはずで、神聖なのです。そこを書くのに日本の近代文学は苦勞してきました。不倫、姦通などを書くわけにいかないです。そう思ってみると、世界文学の中にあまりないような、ある種類の傑作があります。横光利一の「悲しみの代価」などには、日本人の見出しした一つの到達点みたいなものがあります。近代文学はずつと恋愛を書いてきました。世界文学全集でも恋愛は一つの大きなテーマです。「マダム・ボヴァリー」など、大人

の恋愛はみんな不義、姦通です。そこには日本の近代文学はなかなか行けなかつた。

私は「戦後文学史」を書いてるときにふつと気がついた。芥川賞はあるときから恋愛が消えていくのです。恋愛はほとんど出てこなくなつたのです。これは文学の変わり目で大きなことです。では、今日の恋愛みたいなものはだれがよく書いているのか、そこが問題です。

その代わりに出てきたのがセックスの方で、恋愛よりもつと根底にあつて人を動かす問題に変わつてきたわけです。今日はセックスを主題にしたものがたくさん書かれています。今、もしかしたら今日の世の中、日常、現実を舞台にした、いかにも今日の若い男女らしいところの恋愛というのは、神聖に輝かしく描けるかもしれない。とてもいいものが出てくると思うのですが、今は恋愛からは遠くなっています。

現在の文学の特質と課題

ある時期からそれと一緒にもう一つ、犯罪が登場するようになったのです。三島由紀夫が「金閣寺」を書いたところから。大江健三郎が日常の中の性的犯罪のことを書いたり、石原慎太郎も書きました。そこからやがて加賀乙彦が犯罪というものを書いた。その材料にしている書き、大岡昇平が「事故」というのを書いた。あのあたりです。

日本の近代文学は剣の問題を過去のものとして捨てた。また犯罪の問題も何か取り扱ってこなかつた。というのは、病者や犯行者を主人公にすると日常を書く視点が変わります。

我々がごく普通に言っている人間の普通はこうだよ、人間の自然はこうだよというのと逆になるかもしれない。その視点を人れるのがいやだったのだからと推察するしかないです。本当はこれは必要なものです。さつき言った患の問題もそうです。神の問題も逆の形でそこに出てくるとか、それがあるべきなのです。これが割りに乏しい。ただし、別の意味では、犯罪は社会を照らし出す鏡です。本当の文学としてはここは未開拓な領域です。ある時期に、今から三十年ぐらい前ですか、二十世紀に残された未開拓の場所はセックスだと言われた。私はそのころから、もしかするとそれは犯罪だ、ことに理由なき殺人のようなどころにあると思つています。ど、もつとそういうところは探究された方がいいと思います。

また、日本の純文学といわれるものの中には私小説と言われるものがある。私小説作家は日本の純文学の中の純粹な流れをずつとたどってきたような感じがあつて、幾多の優れた作家を生み出しています。私小説は自然主義文学から流れ出てきた。つまり田山花袋とか島崎藤村とか、あういうところから出てきた。ですから、それがあまり日本独特の小説の形で、それが小説をより一層深くする、より一層広くする。毎日毎日が刻々に送つてくれるもつと鋭い社会の問題、現実の問題などを扱えないようにしてしまつていふという声がありますけど、本当はもつと違つた作家も努力をすべきではないか。文学の創造というコースをとらなければいけないのではないか。

日本の作家も外国人、あるいは外国を舞台にして書く。それから外国の人が日本を舞台にして、日本の作家が書いたよ

うなものを書くようになってくる。自然主義作家はどこから小説の形をつくつたか。モデルは全部外国の文学だつたわけです。外国の文学に触れながら、彼らは苦心^{くしん}慘憺^{たんたん}して、この私小説、やがて自然主義を通じて私小説の形の作品をつくつたのです。

今日でも私小説の純粹で本当にいいものは、どこかに私とは何か、社会と人間の自然とは何かという問いかけが含まれているはずで。ちようど生と死、永遠と今というように、一語一語が出てくるようになると、いい作品ができるはずです。いい文体とは何かとか、小説を書くのには何が必要か、作家がどこまで自分を裸にできるか、明治から戦前まで幾多の優れた文学史がいにこう考えるという意味で言つてきたいい言葉が、みな私小説のところに残つています。

もう一つは、今の文学の状況だと、本当は新聞的なジャーナリズムがよくないのです。作品はいろいろ現在の問題を、私小説では書けないような問題を書け、書けというものですから、やたらといろいろな問題を取り上げて小説が長くなりました。今は短編の危機です。いい作品と言われるのがみんな長いのです。昔は三十枚、五十枚のいい短編というものがあった。それが非常になくなつてきた。川端康成賞でも短いものが少なくなつてきた。短編ですと三十、四十枚でどめて欲しいです。それで何か書き切つて一つの作品、一つの美術品という感じを与えるものは、このごろないのです。長く書くと、いろいろの意味や問題が入つていれればいいですけど、そのとき、一つは文章という問題があつて、長編小説のときはあまり文体は言わないです。そこが消えていくわけです。

でも日本の近代文学を創始して以来の幾多の作家が骨身を削つてきたいい文体というものが、その感触が薄れては困りま

す。これと平行して、もつと大きな問題は、新人の詩はなかなか出口がないのです。小説はいっぱいあります。文芸誌の新人賞に出せばいい。実際に賞がいっぱいあります。あり過ぎるほどあります。女性誌などにも新人賞があります。詩はないではないですか。一つだけあります。現代詩手帖です。詩人の新人は自費出版で出てくる。一日に二冊ぐらいずつ出ているそうです。気の毒ではないですか。一編ずつ骨を折って書いて、たまつたものを、また働いて本の形にする。もしか置いてくれるところがなかつたらね。よくないです。今、もし日本の現在の状況に歪みがあるとしたら、この問題は一番大きいです。詩人に出口がないということ。もつと業に出てこなければおかしいです。

だから、小説の方でこのころは夢を多用したものが多くです。新鋭の人はもつと詩人と交流すればもつと鋭くなるのではないかと思うのです。やはり詩人の方が鋭くて新鮮ではずみがある。それがいいから、文学のある部分は甘つたれた表現になつていると思います。これが一番よくないです。

日本の文学は小説が中心です。小説の世界は意外に自由です。私は短歌や俳句や詩は少し閉鎖的な気がします。それは、小説の世界は出口がいっぱいあつて人がたくさんいるからです。小説の世界は二十年ぐらい前から女性がいっぱい進出しています。

もう一つは、これからはいよいよ家族の崩壊が一つの主題

です。今はちょうど戦後五十年たつて、家族の崩壊、その背景にある年齢の人は老いと死です。いつたい生きてきて死んでいくというのはどんな意味があるのかという、それを質問する作品は多いです。若い人の作品のところでも、これから二十一世紀に向かって生きていく人のところにある中心にあるのは、家族の崩壊、崩壊家族です。これは多いのです。ここから新しい何かを見せてくれることが出てくると思います。

文学の場所であつた一つはつきりしていることは、だれかが優れた作品を書いてくれる。今は方々でそれが求められていると思います。若い人が次から次へと出てくる。それは我々も望んでいて、自治体の賞である、文芸誌の賞である、新人賞とか、なるべく出したいと思つてやっています。その中の二十人に一人ぐらいは、何か優れたものを書いてくれる。それを待つています。あまり年をとると若い感じが分からなくなると、早く出てきてほしいと思つています。

(文責・編集部)

